



TITLE:

漢六朝期における大土地所有者と 經營 (上)

AUTHOR(S):

渡邊, 信一郎

CITATION:

渡邊, 信一郎. 漢六朝期における大土地所有者と經營 (上). 東洋史研究
1974, 33(1): 1-26

ISSUE DATE:

1974-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/153539>

RIGHT:

東洋史研究

第三十三卷第一號 昭和四十九年六月 發行

漢六朝期における大土地所有と經營（上）

渡邊 信一郎

はじめに

一 耕地の存在形態

二 富豪層の家族形態（以上本號）

三 傭作・小作農民

四 富豪經營

おわりに

はじめに

1

私は先に拙稿において、漢六朝期に見られる大土地所有の、經營からの研究を、さしあたっての課題として提起しておいた。^① 小稿は、そこで述べた視角をもつてなされた、ほぼ二世紀後半から六世紀末にいたる大土地所有とその經營についての検討の一斑である。

ところで、一般に當時の大土地所有を研究する場合、その主體は豪族と呼ばれている。しかし豪族とは血縁を媒介とした個々の家の同族集團なのであるから、大土地所有の主體を表現する言葉としては甚だ曖昧であり不適當と言わざるを得ない。なぜなら、具體的な當時の史料に即してみても、そうした大土地所有の主體は、概ね富室・豪家などとして表現されているからである。もとよりこのような富室・豪家などが有力家族となって同族結合をはかるのではあるが、だからといって彼らの實現した大土地所有を豪族の土地所有として表現するなら、そこには大きな混亂が生ずるに違いない。小稿ではかかる豪族乃至貴族を構成する有力家族としての富室・豪家を土地所有の主體としてとりあつてゐる。したがって豪族という一般的な表現を避け、さしあつてここでは「富豪」という言葉を用いて富室・豪家などを一括して表現することとしよう。

さて、かつて我々がもっていた統一的な歴史理論は一九四九年の歴研大會報告にみられる所謂「世界史の基本法則」であり、それが今なお我々の研究の出発點として多大の影響を與えていることは言うまでもない。そして、中國前近代史におけるその具體的な適用が、五〇年の歴研大會報告「國家權力の諸段階」で發表された西嶋―堀兩氏による家父長的家内奴隸制範疇を基底とする漢唐間の社會經濟の本質規定は放棄されてしまった。それと相應して堀氏にあって、西嶋氏ほどはつきり表明されてはいないが、家父長の家内奴隸制範疇はやはり放棄されたかのごとくである。確かに西嶋氏の研究は實證的な側面で大きく崩れてしまった。しかしその家父長の家内奴隸制範疇までが實證的に崩れた譯ではなかった。なぜなら、西嶋氏の家父長の家内奴隸制研究は政治的集團としての漢の高祖軍團を研究素材としたものであり、具體的な生産の場を對象として直接に究明したものでなかったからである。だから西嶋氏の研究に對する多くの批判がかりにすべて正しく、高祖軍團が家父長の家内奴隸制範疇でとらえられないものであったとしても、ただちに當時の支配的ウクライドが家父長の家内奴隸制でなかった、とまではいきれないのである。つまり、家父長の家内奴隸制範疇は、理論的な問題提起としては明

確にうちだされていたにもかかわらず、かつて一度も具體的な研究がなされてはいないのである。それ故私は、家父長的家内奴隸制範疇が、漢唐間の土地所有・經營を論ずる際に、今なお少なくとも理論的な問題提起としては、充分な生命力をもっていると考えるのである。なによりもそれは、その背景として世界史的な位置づけの中で中國史を統一的に一貫した論理において把握してゆくための、基礎的諸課題を含んでいたからである。

小稿は、この問題提起としての家父長的家内奴隸制範疇が、單なる問題提起でしかなかったのか、あるいはなんらかの實態をもつものであったのか、とすれば如何なる意味において實態性を有していたのかを主要な課題としている。おりしも前漢期における奴隸制の再検討が西村元佑氏によってなされている^⑥。かくして我々には、家父長奴隸制範疇を具體的に再検討すべき時期が來ていると思うのである。

具體的な検討に入るにあたって、次のような問題を設定しておこう。端的に言って私の問題關心は、さしあたって唐末以後の地主佃戸制の形成過程にある。したがってまず問題となるのは、地主佃戸制を實現してゆくための私的大土地所有形成の基點が何にあったかであり、また地主佃戸制が形成されてくるための前提としての階級的基盤がどこにあったかである。ところで西嶋・堀氏をはじめとする漢唐「個別人身的支配體制」論者の多くは、概ね地主佃戸制の前提を均田制小農民に置かれる。したがって論理的には、地主佃戸制を實現するための大土地所有の基點は當然小農民層による小土地所有の私的性格の強化とその分解に、一方地主佃戸制が形成されてくるための前提としての階級的基盤はこの均田制小農民自體に求められざるを得ない。もとより、漢唐間において小農民層がかなりの部分を占めたことはまぎれもない事實であり、小農民層の分解が地主佃戸制の前提をなすことは當然考慮されねばならない。しかし、こうした過程のみで地主佃戸制形成過程の充分な説明ができるのであろうか。すでに加藤繁氏によって指摘されているように、宋代の大土地所有の前提として、漢唐間においても大土地所有が漸進的に發展しており、そこには多くの奴婢や小作人層が含まれていた。したがってこれらをも視座に含めて考察しない限り、地主佃戸制形成過程の前提は充分に説明し得ないと考えられる。むしろ

ろ、このような漢唐間における大土地所有こそ地主佃戸制形成過程の中核層ではなかったかと、私は考えるのである。つまり、そこに地主佃戸制の原質をもとめようとするわけであり、その原質を理論的問題提起としての家父長的奴隸制範疇の吟味を媒介として考察しようと思うのである。したがってここで當面の問題となるのは、漢六朝期の大地所有が何を基點としてその私的所有を擴大していったかであり、このような大地所有の主體であった富豪層の家族形態が如何なるものであったのかである。

一 耕地の存在形態

漢六朝期には、わずかに十畝程度の零細農から數百頃にも及ぶ大地所有まで、さまざまな規模の土地所有がみられた。本章であつかう富豪層の土地所有が、大地所有であったことは言うまでもない。ではこのような大地所有は、どのようなところに位置していたのであろうか。

周知のとおり當時の富豪層による土地獲得形式は、封固などとして表現される山林藪澤の占據―開發と、賣買強奪を内容とする兼併とである。なかでもこの時期を特色づけるのは、山澤封固であろう。山林藪澤の地とは郊外に廣がる未開の地である。このような山澤の地をいくつもの嶺をつらねて占據し、開拓していったのが彼ら富豪層であった。⑤そして、かかる封固の地が別墅・園田など所謂莊園として形成されるのである。それは、當時の大地所有が單に耕地だけでなく山や湖をもその中に含んでおり、また石崇の金谷園が河南縣界にあったこと、⑥何邁が江乘縣界に墅をもっていたことを始めとして、多くの例に見られるように郊外や縣界などの地において大地所有が形成されていることから傍證されよう。このように、當時の大地所有は、概ね山澤の地を含めた郊外に立地する傾向にあった。

また兼併についても、それが従來のように「人の田地をうばいとり、孤弱の業を劫か」(抱朴子外篇自叙)すことにかわりはなかった。しかし「民間における山澤の占據が、兼併の道を開く」⑦と博子によって指摘されている如く、當時にあっ

てはすでに兼併が山澤の地にまで及んでいたことが分かるのである。つまり、兼併という從來からの土地獲得形式においても、縣城・郡城などといった公權力からより懸隔した地域―郊外へと展開されてゆく傾向にあったと言えよう。

ところで、かかる山澤の地は、古代より共同所有と目されており、六朝期においても國家の規制下に置かれていた。したがって富豪層の山澤占據は、いかに公權力から隔絶しているとは言え、極めて不法なものとなされ、現實にも厳しい規制を受けた。また、とりわけ北朝においては、均田制の名の下に土地はすべて公有とみなされていた。それ故、均田制の具體的な施行はともかくとして、北朝にあっては土地の公有原則がより強固につらぬかれており、法的規定以外の私的所有乃至保有は原則として不法とみなされざるを得ないものであった。では、このような言わば共同所有乃至公有としての山澤の地・均田制下の土地に、どのようにして、そして何を基點として私的所有が浸透していったのであろうか。この問に答える前に、まずその前提として大土地所有が如何に存在したかについて見ておく必要がある。

宮崎市定氏は、六朝期の大地所有を規定して、一圓的な所有であったとされる。筆者も、錯圃形態を基礎とする宋代の大地所有とは異なるという意味で、基本的には賛成である。ただ一圓的という意味については、今少し考察を加えてみる必要がある。というのは、大地所有の多くが散在の形態をとっているからである。たとえば蕭景先の例に見る如く、彼には宅地の他に三ヶ所の耕地があり、また陶淵明にも十畝の宅地の他に南山の麓には豆田があり、宅の西には別に耕地が存在した、という具合にである。また習氏には襄陽城郊外に宅地と魚池（園池）があった他、漢水を更に下った木蘭橋附近にも宅地とそれに附接する魚池を所有していた。更に、隋の楊素には東西二京にある宅地の他に、本貫地華陰をはじめ多くの田宅があったとされ、謝混は田業（園宅）十數ヶ所の他に、會稽・吳興・琅邪などの地にも耕地を所有していた。このように當時の土地所有は、多分に散在性を有していたのである。

ところで、これらの分散した所有地それぞれについて見れば、韋載の耕地や王崇の穀田が十頃程度であったり、張衡の賜田や崔陵が李曉に與えた良田が三十頃であったり、また小さくても王羲之が要求した烏澤や吳興にあった耕地が一頃・

二頃^⑨であつたように、六朝期の大地所有は、頃單位で計られる比較的まとまつた土地なのである。つまり、散在した所有地についてみれば、それは個々に一圓的であつたと言える。

また、これら散在した田地は、散在したままに放置されたわけではなかった。六朝期にはすでに田地の管理機構がかなり發達しており、個々の耕地には園客などと呼ばれる管理者が置かれていた。そして家主の住する宅を中心に、家主あるいは宅督などと稱する家計擔當者^⑩によって、各耕地は統一的に管理されていたのである。かくして六朝期における大地所有は、一圓的的所有とその散在性との統一として存在していたことが分かるのである。

さて、我々は先の設問に戻らねばならない。ここで注目すべきは、大地所有の耕地が散在し、各耕地が概ね宅^⑪(舍)と結合されていることである。かかる宅と耕地との結合は、前述したように分散した耕地を統一してゆくための媒介として機能しただけではなかった。李衡が甘橘千株の果園を作った時まず客十人を遣つて宅を建設させ、あるいは崔暹が自分の家を分轄し、子供を三縣に分居させて廣く田宅を占據していったように、耕地の擴大・獲得には必ず宅の附設を伴つたのである。つまり、宅の建設とその耕地との結合を通じて耕地が擴大・獲得されているのである。この結合こそ、公有原則を切り崩しつつ私的所有が擴大してゆくための基點を明らかにする手掛りなのである。

では、宅とは如何なるものであつたのだろうか。宅とは、もとより人の住む家屋のみを指すものではなかった。そこには、家屋の他に蔬菜栽培のための家園や劉仁之の宅に見られるように田地^⑫が設けられていた。それ故、宅は、とりわけ零細農の場合に明らかなように、人々の生活基盤であるとともに、その生活を再生産してゆくための最も基礎的な生活資料を得る場となり得たのであつた。のみならず宅地そのものは、發生史的にも私的土地所有の始源とされ、また均田制規定の中にあつても還受を免除し私有が許された土地であつた。つまり、最も私的性質が強固な土地だったのである。したがって私的性質の最も強固な宅地と散在する個々の耕地との結合は、宅のもつ私的性質の耕地への擴延を意味したのである。つまり、宅との結合によって私的性質を強化された耕地が各地に設置・擴大されることにより、公有原則に基づく山

澤の地・均田制下の土地の中へ私的大土地所有が浸透してゆき得たのである。かくして我々は、大土地所有の擴大の基點として宅地を位置づけることができるであらう。

以上述べてきたことを要約すれば、それは、六朝期の大土地所有は、一圓的所有とその散在性との統一として存在し、宅を基點としてその私的所有を擴大してきたと言ふことである。このような當時の大土地所有の存在形態は、我々が明らかにしようとしている富豪層の土地經營の在り方によって一方で規定されているとともに、逆にその經營の在り方をも規定しているはずである。その具體的様相は後に見ることとして、さしあたってここでは、土地所有の存在形態に關連して次のことを指摘しておこう。

前述の如き散在耕地における宅舎の存在は、そこに勞働力としての人が存在したことを表わしている。先の謝混の田業を例にとれば、そこには僮僕・業使などと稱される人々が派遣されていたと見られるが、彼らはこれらの田業管理を委任されていた謝弘微の直接經營下に置かれていたものと考えられる。また前述の蕭景先の三所の田地の場合は、家族勞働によって直接經營するべきものとされ、勞働力不足の時には奴婢を買って勞働力に當てるよう指示されていた。かくして、散在耕地ではあつてもかかる富豪層の直接經營地の存在を知ることができるのである。ところでこのような直接經營地の他に、たとえば穆提婆に下賜された清風園のように租賃に出された耕地もある。また玉環山にあつた郗鑒の別墅には、その設置時とおぼしき東晉以來、數百家が居住していたと傳えられている。彼らは恐らく郗氏の別墅を小作した人々であつたに違いない。更に、鐘山にあつた八十餘頃の王騫の別墅は、諸宅及び故舊とともに經營されたものであり、王氏の直營にかからない部分を含んでいる。かくして、當時の大土地所有には直營地の他に間接經營地の存在したことが分かるのである。かかる大土地所有の經營區分のうち、富豪層にとって重要な役割を果たしたのは、やはり直營地であらう。なぜならそれは、私的所有の基點としての宅地ともっとも密に結びつけられていたからである。

以上の考察を通じて我々は、私的所有發展過程におけるその基點としての宅地の意義を確認した。しかし、かかる土地

所有を私的所有たらしめたものは、やはりその實現形態としての土地經營に他ならない。かくして我々は、富豪層による土地經營へと目を移さねばならない。そこまですまじ問題となるのは、宅地を私的所有發展の基點たらしめるための宅地を中心とした經營——直營地經營の在り方である。我々はこれを、まずその勞働力から考察しよう。ここで問題になるのが、かかる宅の居住者であり、直營地勞働力の中核とも言うべき富豪層の家族形態である。それはまた、それ故地主佃戸制が形成されてくるための前提としての階級的基盤の本源的な在り方を示していると考えられるからである。

二 富豪層の家族形態

漢六朝期の富豪層の家族形態について、我々はほとんど研究らしいものをもっていない。比較的まとまったものとして、ただ守屋美都雄氏の簡単な素描があるだけである。我々はとりあえずこれを手掛りとして、富豪層の家族形態を吟味することとしよう。

守屋氏は、漢唐間の門閥貴族・豪族の個々の家——我々の所謂富豪の家族形態——について、そこに散見する「百口」「良賤百口」の語に注目し、それが大家族制であつたこと、及びその中に非血縁家族を含んでいたことを指摘された。守屋氏の見解は、主として唐代の史料によって導かれたものであり、漢六朝期の史料に至つては、わずかに二、三にふれておられるにすぎない。しかし漢六朝期を通じてみても「百口」^④、「奴婢百口」^⑤、「良賤百口」^⑥の語は頻見し、當時の富豪層の家族形態が非血縁家族をも含む大家族制であつたことを證明している。

以上によって、一應當時の富豪層の家族形態は基本的には大家族制であることが分かった。では、具體的にどれほどの家口數を含んでいたのだろうか。そこで吟味されねばならないのは、かかる「百口」がそもそもどれほど具體的な家口數を表わす語句であつたのかということである。守屋氏が擧げられたように、「百口」の語が史乘に現われるのは、後漢書趙岐傳の「閭門百口」を嚆矢とする。かかる「百口」の語は整數であつて、初出の時點ですでに修辭化していることは

言うまでもない。そして、この「百口」なる語は、以後六朝隋唐期を通じて富豪層の家族の代稱として、盛んに使用されている。中には、具體的な内容を示さないまでに形骸化した使用例もある。しかし、かかる「百口」の語が使用され始めるに當つては、少なくとも何らかの實態を具有したものでなければならぬ。事實六朝期に於ては、かかる「百口」の實態を表わすと思われる史料が數多く殘されている。たとえば、「搜神記」に見える陳氏の場合には一家百餘口・百三口と記され、また「雜鬼神志怪」にみえる陳無忌の家口も百餘口と記されている。こうした志怪小説のみならず正史中にも、たとえば廬氏には「祖父より孫に至るまで家内に百口」^⑧ あつたと傳えられ、庫狄伏連には家口百餘があつたと傳えられている。このように正史・小説を通じて、百口に近い家族數が散見するのである。したがつて、少なくとも漢六朝期における「百口」の語は、空疎な修辭ではなく、その背景に實態をも具有したものであつたと言える。しかし、この「百口」によつて表わされる數値をもつて、ただちに標準とするわけにはいかない。なぜなら、「異聞集」(太平廣記卷二三〇所引)に見える張龍駒の家口が良賤數十口と記されているように、一方で數十口の家族が存在しており、更に累世同居形態の頻見する北朝に於ては、博陵の李氏のように一九八口(北史卷八五節義傳李几傳)など一家二百口に近い例も見られるからである。したがつて「百口」とは、概ね數十口乃至百數十口といった大家族に注目して用いられた言葉であつたと考えるべきであらう。ともあれ、當時の富豪層の家族形態は、賤民・非血緣家族をも含んだ大家族制であることが、ここであらためて確認されたわけである。

ではこのような大家族はどのような秩序をもつて編成されていたのであらうか。もとよりそこには「孝・悌」を媒介とする倫理的な秩序關係が見られはした。しかし我々がここで考察しようとするのは、このような麗しい人間關係のそれではない。かかる孝・悌倫理は、中國前近代に一貫して見られるものであり、そのままでは我々が考察對象とする歴史的な意味における家族秩序を規定するための指標とはなり得ないものである。また、前述した如くかかる大家族の中には、奴婢などの賤民を主とする非血緣家族が含まれていた。従つてそこには、孝悌倫理では律しきれない、これら非血緣者に對

する何らかの支配―隸屬關係が當然入り込んでくる。我々が問題にしようとするのは、この支配―隸屬關係をも包括してゆく歴史的な家族秩序―形態なのである。ところで、すでに玉井是博・濱口重國氏らによって明らかにされているように、かかる賤民は、漢代以來血縁家族とともに「家人」と稱されていた。^⑩またこれら家人を統率する富豪層は家主・家長などと稱され、「家主たるの法」をもつてすべての成員―家人に家を經營してゆくための任務を分擔し統合していた。^⑪我々が、問題にしなければならないのは、富豪層が大家族を日々に再生産してゆくに當って、家人を規律し統合してゆくこのような秩序の性格である。それは、その秩序の形成を媒介するものによって端的に表現されていると考えられる。そして、それはかかる大家族の性格をも規定するであらう。

さて、漢六朝期を通じてみられるのは、死に臨んで父が子に與える遺令である。このような遺令は、概ね死後の處置を諸子に守るべきものとして戒めたものである。ところで、かかる戒めは「敕」の語によって表現されている。^⑫この敕こそ家主―家人秩序を媒介するものに他ならない。今少し具體例を挙げよう。たとえば、吳の中書郎盛仲は失明した母王氏のために婢に敕して食事をとらせており、^⑬晉の竺長舒は隣家の失火に際し、家人に敕して荷物を運び出すのを禁じている。^⑭また京師の穀物不足のうちに、婢が粟をよりわけて賣りに出そうとしているのをみとがめた趙琰は、敕によっていいなをとりのぞかせており、^⑮更に罪に擬せられた薛道衡は赦免にあうものと心得て、伺候するであろう賓客のために、家人に敕して食物を用意させている。^⑯以上のことから、良賤を問わず家人たるものすべてに、生活のあらゆる面に涉つて敕が用いられ、家の經營がなされていたことが分かる。そして、單に生活の諸部面に涉つてだけでなく、戴眇の例にみられるように、敕はまたその僮客の生殺をも左右するものとして現われている。^⑰かかる敕の用例を見るなら、單なる戒めとしてではなく、それは生殺與奪をも規定する拘束力をもつものであったと言わざるを得ない。それ故、敕を媒介として表現されるこのような家主の家人に對する拘束力―一種の權力は、充分家父長權と稱するに足るものである。そして、かかる家父長權を通じて編成・經營される大家族は、その中に賤民・非血縁者をも含むことを考えあわせるならば、正しく家父長制

家族と呼ぶにふさわしいものであろう。

我々は「百口」によって表現される富豪層の大家族形態を家父長制家族と規定したわけであるが、では、かかる家父長制家族の具體的な様相はどのようなものであったのだろうか。すでに述べたように大家族の成員はすべて家人と呼ばれ、血縁・非血縁家族によって構成されていた。我々は、血縁・非血縁家族の實態について、以下に考察を加えることとしよう。まず血縁家族から。

宇都宮清吉氏によれば、具體的な個々の家族構成を別とすれば、漢代の家族は父母妻子同産を構成員とする三族制複合家族をその本來的な在り方としていた。したがって、もしそれがその本來的な構成を完結した場合には、概ね二十口前後の家口數を有することになるはずであった。ところで、かかる本來的な形態としての三族制複合家族は六朝期にも基本的にあてはまる。それは、顔之推が「二十口の家」を基礎として奴婢田宅の理想的な所有規模を考えていること（顔氏家訓足篇）によっても證左し得る。さらに、崔櫓が「家」ぐるみで殷州刺史に赴任した時、櫓の「兄弟父子」ともに葛榮によって殺害されていることや、前述の廬氏が祖から孫に至る三世代同居を實現していることなどは、充分その傍證となり得よう。しかし、宇都宮氏もすでに指摘しているように漢代においてすら分財異居が見えており、六朝期に至っては、以下に見る如くかかる傾向が一層進展していた。つまり、三族制複合家族は解體に瀕していたのである。とりわけ南朝にあつては「小人は情禮に薄く、父子はたいてい異居」（隋書卷二九地理志梁州）しており、一般的に「士大夫以下、父母存命中にもかかわらず、兄弟で家計を別にするものが十家中七家。庶民で父子が財産を別にするものも八家中五家。はなはだしい者に至っては、なんと危急の際にも知らん顔、饑え寒さを助けようとしなない」^⑤あり様である。このように、六朝期においては生分・分財別居が盛行し、部分的にはすでに單婚乃至個別家族が成立し始めていたと言えよう。また、たとえ同じ家に住んでいても、成員は「各々財産を別にし、同居しながら炊事を異にし」^⑥ているくらいだから、外皮は三族制形態をとってはいいても、内實はその中で單婚乃至個別家族の形成されつつあったことが分かる。

ところで北朝においては、累世同居の例が、とりわけ士人層に多い。では、これは何がしか古い家族形態を表わすものであろうか。ここで注意すべきは、かかる累世同居形態が賞賛の対象となっていることである。これは、累世に渉る家族の仲睦まじさに對する倫理的な賞賛であつて、むしろかかる形態が珍らしいものであつたことの表現に他ならない。なによりも、三世同居をしていた崔氏が連年の饑饉という危急の際になつて始めて家の分轄を行つたことを見れば、累世同居形態は、經濟上富裕であり、しかも倫理的な生活を旨とする家族にのみ見られる特殊な現象であつたことが分かる。したがつて、かかる累世同居形態は、古さの表現ではなく、逆に經濟力の高さを前提にしたものであつたと言える。それ故、こうした問題は當時の士人層における倫理生活を對象にすべきであつて、さしあたつて我々の考察對象とはなり得ない。注意して見るならば、北朝にあつても父母死後における分財別居の例がまゝある。また先に擧げた崔暹の例では、父が子を別居させて田宅の擴大を計るなど、なお恣意的ではあるが、すでに南朝に近い状態になっている。かくして、一般的形態としては南朝ほど顯著ではないが、北朝においても三族制家族は、解體の方向にあつたことが分かる。

以上血縁家族について見れば、六朝期においては江南と華北とは少しく程度を異にするものの、一般的に三族制複合家族形態から單婚乃至個別家族形態へと移行しつゝあることが分かる。次に非血縁家族に目を移そう。

非血縁家族の場合には、血縁家族のような特定の家族形態をとらないことは言うまでもない。かかる非血縁家族の中には、太平經に見えるような十餘年も富豪に雇われ、奴使されている長期の庸客もいる。しかし、非血縁家族の多くは、このような良民ではなくて賤民であつた。當時の賤民は、奴婢・家僮をはじめとして、蒼頭・奴客・僮僕・僕客・僕使など多様な名稱をもって現われる。彼らは、耕作・牧畜・商業・家事など多様な勞働に従事した。その場合、たとえば祖述・李叔堅の例に見る如く「家僮・子弟、耕してのち食らう」・「兒・婢はみな田中にあり」などという具合に、彼ら賤民は、血縁家族とともにすべて家主の下に勞働力として勞働過程の中に投入されている。彼らは、概ね賈買や略奪などによつて家主の手に入れられ、その身を個別的人格的に所有されていた。それ故、自らは生産手段の所有者たり得ず、家主から勞

働過程において直接に剩餘勞働そのものの收奪をうけている。したがって彼らの多くは、家内奴隸範疇でとらえられるべきものであらう。これら家内奴隸—奴婢は、漢代とはことなり、六朝期においてはかなり自由に賣買されている。^⑧「家に私積なし」と言われた顧譚にさえ奴婢が十人近く存在した。^⑨したがって當時の富豪層には、かなりの家内奴隸が蓄積されていたはずであり、その農業經營においては基幹的な役割を果していたと考えられるのである。

ところで注意すべきは、六朝期の家父長制家族の中には、かかる家内奴隸制範疇ではとらえきれない賤民が存在したところである。我々は、少なくとも三國時代には家内奴隸であったと考えられる麋氏の僮客を通じて、これを考えてみることにしよう。

蜀漢創業の功臣の一人麋竺は、六朝期の小説にもたびたび登場する人物であり、この時期の富豪としても代表的人物であった。三國志本傳によれば、彼は東海郡朐縣の人であり、代々貨殖にはげんだため、竺の代には僮客萬人、貲産は鉅億にのぼったと言われる。ところで趙宋の初めに編纂された太平寰宇記には、當時の故老の言い傳え及び編者の見聞が記述されている。

(東海)縣の治城は、鬱州(島)の上にある。……故老が傳え聞きに言うには、この島上の人は、みな趙宋以前には、麋家の隸民であつた、と。現在宋初では、ここに牛欄村があるが、舊來麋家の莊園があつたと云われる。現在なお幸福を祈つてお祭りし、「麋だんな」と呼んでいる。祭の當日には、人々は犁用の靴をはき、耕牛用の鞭をとる。また、初めて妻をめとる者は、必ず先に「麋だんな」におめどおりする、でなければ祟りがある、と言う。^⑩

ここに見える趙宋初の故老の舊聞、及び編者の見聞をまとめれば、次のように解釋できる。鬱州にある牛欄村は麋家の莊園のあとに成立したものであり、その居民は、元來麋家の隸民(麋竺の時代では少なくとも僮客)であつた。そして、故老の語り口からすれば、彼らは、すでに趙宋初において身分的には自由を得ていたと思われること。更に「麋郎」祀に對する居民と「麋郎」との関係は、趙宋を遡る遠い時代の社會事象が習俗化したものと見られること。そこでは、なお「麋

郎」に對する農耕奉仕の習俗化と、婚姻に對する「麿郎」の規制の習俗化が看取される。また、婚姻規制の習俗化から見て、趙宋以前すでにこの隸民たちが、主家たる麿氏の許諾の制限内にではあれ、婚姻を許され家族を有したことを窺わせる。つまり、先の家内奴隸としての僮客とこの記述とをつきあわせてみるなら、そこに我々は、家内奴隸が三國―趙宋初の間に自らの小經營を家父長制家族の内部から形成し、自立してゆく過程を見いだすであろう。それでは、この記事の信憑性はどの程度あるのか。

まず、太平贅字記そのものの價值が問われねばならない。周知のとおり本書は、宋初殘存した六朝以來の地誌・詩文その他を多分に活用している。とともに、それを利用して批判・考證を試みている點で、かなりの信賴度を有するものである。^⑧それ故、本書の編纂態度には、疑問を呈する餘地がない。それでは、個々の内容についてはどうか。

まず故老の言に窺えるように、麿氏が地方の勢家として唐代まで存続していたかどうか。そこで、八世紀以降唐後半期の氏族をとり扱ったとされる敦煌發見「天下姓望氏族譜」を見ると、その海州東海郡十姓のうちに、まぎれもなく麿氏の名が見える。^⑨また、唐代元和中に行なわれていた諸家の氏族譜を編纂したものとされる「元和姓纂」にも麿氏の名があり、六朝期に生存した麿昂之の名が見える。^⑩ここから我々は、麿氏以來史乘にこそその名を現わさないまでも、地方の一富豪として麿氏が隱然たる聲望を唐末まで維持していたことを知る。とともに、故老の言い傳えの正確であつたことをも確認し得る。

それでは、先に牛欄村の居民の習俗から推測された隸民の家族形成狀況と主家の隸民に對する規制とは、どうであろうか。我々は、ここに六朝期の興味深い一説話を知っている。

吳興の戴眇さんとこの家がかえ僮客王氏には、若い婦人がいてべっぴんさん。それで眇さんの次弟、しょっちゅうでかけていつてはつきまとう。僮客は内心腹立たしく思い、いちぶ始終眇さんに告げて言う。「中のだんなさまがかくかくのことをなさいましたが、あまりに理不盡。(だんなさまの)お敎話のままに。」と。眇さん、そこで弟に質したところ、弟は大いにののしって「いかさまさよ

うなことがあります。きつと妖鬼め。敕をいただき打ち果してくれましよう」と。(後略)

この説話によれば、ここに現われる僮客は、明らかに王という姓をもち、婦人を有し——つまり家族を形成している。その點では、原則としては、姓も家族も持ち得ない奴婢身分とは異なるし、家族を形成しない「本來的な」奴隸とも明白に區別される。またここでは、僮客王氏の夫婦關係——家族が、戴紗の「敕」——家父長權によつて保護されている。それは、逆の意味で夫婦關係の維持には、かかる家父長の許諾を必要としたことを表わす。更に「家僮客」とあるように、それはまた家の内部に包攝されていたが、他方「往いてこれに就く」とあるように主家とは別の所に戸と窓のある家屋を營んでいた。そこでは、富豪層の家の内部にはあるが、明らかに小經營形成の胎動が確認できる。この説話の原載は、劉宋の宗室・劉義慶の手になる「幽明錄」である。我々は、ここから少なくとも劉宋時代には、僮客がすでに小經營を形成しつつあり、かつその婚姻が家父長權——敕の規制下にあったことを知るのである。

ところで、今一つ面白い説話がある。顏之推の「冤魂志」の逸文である。長文なので以下に略述しよう。

劉宋の頃、永康の人呂慶祖は、常時、奴の教子に壁舎の管理をさせていたが、ある時壁舎見廻りの途中、何者かに殺害される。ところで族弟の無期は、以前より慶祖に錢を借りていたので、衆人の疑うところとなる。彼は、冤罪をはらすべく慶祖の柩に呪訴する。ところへ夜半に慶祖が枕もとに立つて言った。「近ごろ奴の教子めの畦疇を檢分したところ、不行届きであつた。それでいたくこらしめてやろうと思つたが、奴のためにかくかくの次第で殺されたのである。」と。そこで無期は、奴が住んでいる家屋をとり調べたのち奴をとらえて詰問し、奴の自白を得たあと、教子とその二人の息子を火刑にした。^⑦

この説話では、奴が二人の息子をもつていたことになる。一般に奴婢の場合、通常の婚姻生活を営み得ないため、子の母は確認できても父については確認困難であつたと考えられる。したがつて子供の多くは、母親に附随したものと見られる。^⑧この説話の場合、父親が分つていふことは、そこに通常の婚姻生活が存在したと言ふことであり、明らかに家族が形成されている。更に大事なことは、「履行して奴教子の畦疇を見たるに理らず」とあつて、教子には、彼が管理す

べき耕地として特定の田地が割りあてられていることである。つまり、不十分ながら労働過程を自己の掌中に収めていたわけである。ここから我々は、奴婢身分でありながら、一定の家族を有し、自己のものとして割りつけられた特定の田土を耕す奴のいたことを知る。

もとより、先の僮客王氏もこの奴教子の説話も、事實ではないかも知れない。しかし六朝期の説話は、主觀的には眞實を傳えたものとして當時の人々に受けとられていた。またそれは、説話であるが故に多くの民衆の傳え手が必要とした。それ故、背景となった社會が全く現實ばなれたものであれば、それは事實としては傳えられなかったであろう。否、むしろ説話であるが故に、當時の社會に無數の「僮客王氏」や「奴教子」がいたことを示すのである。事實北朝においても、高謙之の「家がかえ僮隸」は家族を形成していたことが傳えられている。かくして、六朝全期を通じて大家族内部において小經營が形成されつつあることを知った。

では、まだ主家の内に包攝され、相對的には——つまり主家に對しては自立していない、形成されつつあったかかろ小經營は、如何なる範疇としてとらえるべきであろうか。ここで注意しなければならないのは、「奴教子」である。彼らは、労働過程をこそ掌中に行っているが、主家に對して自立した再生産を行なつてはいない。また耕作すべき特定の田地を割りあてられてはいるが、主家より耕作を委ねられている期間以外は田地の保有を實現していた形跡がない。したがって彼らは、「未來の農奴」とは見なし得ても、決して農奴とは規定し得ないものである。更に彼らは、息子ともども私刑を加えられるなど全く無權利狀態に置かれており、労働手段をも所有していなかったと考えられる。したがって、労働過程を掌中に行っているために家主による恣意的・直接的な剩餘労働の收奪がいささか緩和されていることや、小經營を形成しつつある點で、彼らは「本來的な」奴隸とは異なるが、やはり奴隸範疇の内に抱括されるべきものであろう。

ともあれ、以上の考察を通觀してみるなら、先に太平實字記の記述から推測された現象を現實に起り得たものとして確證し得る。つまり、三世紀から十世紀後半に至る農家の變遷——三國時代の家内奴隸としての僮客→小經營を形成しつつあ

る六朝期の僮客（寰宇記の隸）↓趙宋初の牛欄村民——を見るなら、所謂「中世」は、富豪層の家父長制家族の中から、漸進的にはあるがしかし着實に、小經營農民が形成されてくる歴史的時代として一面では把握されよう。

以上非血縁家族について言えば、それは、わずかな長期的傭客などの良民を除けば、概ね賤民によって構成されていた。これらの賤民は、多くは家内奴隸範疇でとらえられるべきものであった。しかし彼ら家内奴隸の中には、少なくとも劉宋期までには主家の内部で不完全ながら家族を形成するものも見られ、小經營を形成しつつあるものもいたのである。

さて、以上漢六朝期の富豪層の家族形態についてみれば、それは、概ね數十口乃至百數十口を規模とするような大家族であった。それは、その内に血縁・非血縁・良・賤を含み、「敕」などを通じて表現される家父長権によって統合された家父長制家族であった。しかし、その具體的様相を見れば、その血縁部分を構成する三族制複合家族形態はすでに解體しはじめており、單婚乃至個別家族へ轉化しつつあった。一方その非血縁部分を主として構成した家内奴隸においても小經營が形成されつつあった。したがって、六朝期における家父長制大家族は、すでに解體期を迎えつつあったと言える。

ところで、かかる家父長制大家族を表現する「百口」の語は、漢末の趙岐の「闔門百口」を初出としており、にもかかわらず、すでに修辭化していた。したがって發生史的にみれば、家父長制大家族の實態は、漢代を通じて形成されてきたものであるに違いない。とすれば、その母體となったのは、當然前漢期に見える所謂小家族であろう。彼らは、すでに古くは宇都宮清吉氏によって、新らしくは西村元佑氏によって指摘されている如く、その内に家内奴隸を含んでおり、六朝期の家父長制大家族の原初的形態を具備している。それ故かかる「小家族」が漢代を通じて整理統合された結果、「百口」によって表現される家父長制大家族が形成されてきたものと考えられる。このことは、次のことを表わす。すなわち、かかる家父長制家族の發展過程は、とりもなおさず私家における支配—隸屬關係の發展であつたことである。なぜなら、すでに漢代の「小家族」には家内奴隸が存在し、原初的形態ではあるが支配—隸屬關係が見えており、六朝期に至っては、

家父長制大家族の家長は、すでに考察した如く家人—とりわけ非血縁—との關係において、剩餘勞働の收奪を内容とする支配—隸屬關係を結んでいたからである。更に六朝期にあつては、「未來の農奴」というべき形成されつつある小經營が見られるように、その私家における支配—隸屬關係は、一層複雑化している。また、これを國家との關係でみれば、かかる富豪層は、なお一編戸として原則的には租調を收奪されており、それとの關係においては被支配者として存在するのであった。にもかかわらず、私家においては、自ら收奪者として家人を支配しているのである。したがって、かかる家父長制家族の六朝期における發展は、國家の支配の私家への貫徹が弱まりゆく過程として、一方では私家における支配—隸屬關係の進展として現出する。つまり、前述した宅地を基點とする富豪層の私的大土地所有の發展過程を、その勞働力の中核層たる富豪層の家族形態から見るならば、その私的支配の發展過程として相互規定的に理解することができるのである。かかる意味において、この家父長制家族を地主佃戸制への見通しをもって論ずれば、それは、粟氏の例にも窺える如く、明らかに地主佃戸制的生産關係の前提としての階級的基盤をなしたるものと言いうるであらう。

さて、當時の富豪層にはかなりの家内奴隸が蓄積されており、彼らが富豪經營の主要な勞働力となつたであらうことは、すでに述べた。したがって、彼らを含めた家人をもつて經營される富豪經營は、その家人によつてなされる經營—直營地經營のみについて論ずるならば、家父長的奴隸制經營と規定さるべきものであらう。では、ここからその大土地所有を單純に家父長的奴隸制で規定してよいであらうか。注意すべきは、しばしば述べた如くこの家父長的奴隸制經營の内部についてみても、すでに小經營の萌芽が見られることである。つまり、本來的な意味における家父長的奴隸制は、六朝期においては外郭としてのみ現われているにすぎず、現實には形態轉化を遂げつつあつたと言える。また、富豪經營はその外部からもたらされる勞働力—傭作をも使用する場合があり、大家族の勞働力だけで完結してはいない。更に富豪經營は、その外延に他の小經營による小作地—間接經營地をもっている。それ故、富豪層の大土地所有の性格を規定するためには、かかる外延の小經營の存在形態をぬきにしては考えられない。この外延の様々な小經營との相互關係の中で當該段

階における富豪經營を考へることにより、はじめて家父長的奴隸制範疇の具體的な有効性が明らかとならう。もはや章を改める時期が來た。

註

① 「漢六朝期の大地所有制研究をめぐって」(『東洋史研究』第三卷第三號 一九七三)

② 一例を擧げておこう。北史卷六齊本紀上に

豪貴之家。不得占護山澤。其第宇車服。婚姻送葬。奢僭無限者。並令禁斷。

③ 「漢代王・侯の私田經營と大地所有の構造——秦漢帝國の人民支配形態に關連して——」(『東洋史研究』第三卷第一號 一九七二)

④ 「唐の莊園の性質及び其の由來に就いて」(『東洋學報』第七卷第三號 一九一七 『支那經濟史考證』上卷所收)

⑤ 山澤占據・開拓の問題については次の論文がある。

唐長孺「南朝の屯邸別墅及山澤佔領」(『歷史研究』一九五四 一二 一九五四)

⑥ 宋書卷五四孔季恭傳附孔靈符傳に

又於永興立野。周回三十三里。水陸地二百六十五頃。合帶二山。又有果園九處。

梁書卷二五徐勉傳に

中年聊於東田間營小園者。……由吾經始歷年。粗已成立。

桃李茂密。桐竹成陰。陸陌交通。渠畎相屬。華樓迴榭。頗有臨眺之美。孤峯叢薄。不無糾紛之興。濱中並饒孤蔭。湖

裏殊富芰蓮。

なお謝靈運「山居賦」參照。

⑦ 世說新語品藻篇注所引石崇「金谷詩敘」に

有別廬在河南縣界金谷澗中。或高或下。有清泉茂林。衆果竹柏藥草之屬。莫不畢備。

⑧ 宋書卷四一后妃傳前廢帝何皇后傳に

遇少以貴戚居顯宦。好犬馬馳逐。多聚才力之士。有墅在江乘縣界。去京師三十里。遇每游履。輒結駟連騎。武士成群。

⑨ 南齊書卷二九周山圖傳に

山圖於新林立墅舍。晨夜往還。上謂之曰。卿罷萬人都督。而輕行郊外。自今往墅。可以仗身自隨。以備不虞。

隋書卷三九賀若誼傳に

誼家富於財。於郊外構一別廬。多植菓木。每邀賓客列女樂。遊集其間。

⑩ 群書治要卷四九「傅子」に

一臣蔽賢。則上下之道塞。商賈專利。則四方之資困。民擅山澤。則兼井之路開。

⑪ 「中國史上の莊園」(『歷史教育』第二卷第六號 一九五四 『アジア史研究』第四所收)

⑫ 南齊書卷三八蕭景先傳に

所賜宅曠大。恐非穀等所居。須喪服竟。可輪還臺。劉家前宅。久聞其貨。可合率市之。直若短少。啓官乞足。三處田勸作。自足供衣食。力少。更隨宜買贖。奴婢。充使。不須餘營生。

⑬ 箋注陶淵明集卷二「歸園田居」詩に

開荒南野際。守拙歸園田。方宅十餘畝。草屋八九間。(其

一)
種豆南山下。草盛豆苗稀。晨興理荒穢。帶月荷鋤歸。(其

同卷五「歸去來辭」に

農人告余以春及。將有事於西疇。

同卷三「癸卯歲始春懷古田舍」詩に

秉耒耨時務。解顏勸農人。平疇交遠風。良苗亦懷新。

⑭ 水經注卷二八沔水注に

水又東入侍中襄陽侯智郁魚池。郁依范蠡養魚法。作大陂。陂長六十步。廣四十步。池中起釣臺。池北亭。郁墓所在也。列植松篁於池側。沔水上。郁所居也。又作石狀逗。引大池水於宅北。作小魚池。池長七十步。廣二十步。西枕大道。東北二邊。限以高堤。楸竹夾植。蓮芡覆水。是游園之名處也。……沔水又東逕豬蘭橋。橋本名木蘭橋。……橋北有智郁宅。宅側有魚池。池不假功。自然通瀉。長六七十步。廣十丈。常出名魚。

晉書卷四三山濤傳附山簡傳に

諸習氏荆土豪族。有佳園池。

⑮ 隋書卷四八楊素傳に

素負冒財貨。營求產業。東西二京。居宅侈麗。朝毀夕復。營繕無已。爰及諸方都會處邸店水碓。并利田宅。以千百數。

隋書卷六六榮毗傳に

楊素薦毗爲華州長史。世號爲能。素之田宅。多在華陰。左右放縱。毗以法繩之。無所寬貸。

⑯ 宋書卷五八謝弘微傳に

公主以混家事。委之弘微。混仍世宰輔。一門兩封。田業十餘處。僮僕千人。……自混亡至是九載。而室宇脩整。倉廩充盈。門徒業使。不異平日。田疇墾闢。有加於舊。……九年。東鄉君薨。資財鉅萬。園宅十餘所。又會稽吳興琅邪諸處。太傅司空琰時事業。奴僮猶有數百人。

⑰ 陳書卷十八韋載傳に

天嘉元年。以疾去官。載有田十餘頃。在江乘縣之白山。至是遂築室而居。

北史卷八四孝行傳王崇傳に

是年夏。風雹。所經處。禽獸暴死。草木摧折。至崇田畔。風雹便止。禾麥十頃。竟無損落。

⑱ 隋書卷五六張衡傳に

衡俯伏辭謝。奉觴上壽。帝益歡。賜其宅傍田三十頃……北史卷一百序傳に

遷都于鄴。曉便寓居清河。依從母兄崔陵鄉宅。陵給良田三十頃。曉遂築室居焉。

⑲ 漢魏六朝一百三家集「王右軍集」卷二吳興帖に

墳墓在臨川。行欲改就吳中。終是所歸。中軍住以還田一頃。烏澤田二頃與與。想弟可還以與吾。

②① 梁高僧傳卷十三釋慧受傳に

嘗行過王坦之園。夜輒夢於園中立寺。如此數過。受欲就王乞立一間屋處。未敢發言。且向守園客松期說之。

宋書卷八三黃回傳に

(戴)明寶尋得原赦。委任如初。略免回。以領隨身隊。統知宅及江西墅事。

梁書卷十鄧元起傳に

少時又嘗至其西沮田舍。有沙門造之乞。元起問田人曰。有稻幾何。對曰。二十斛。元起悉以施之。

この田人は稻の殘高を知っているのであるから、當然田舎の管理を行なっていたはずである。なお、宋書卷七七柳元景傳に「守園人」の語が見える。

②② 梁書卷十蕭穎達傳に

御史中丞任昉奏曰。……風聞。征虜將軍臣蕭穎達啓乞魚軍稅。輒攝穎達宅督彭難當。到臺辨問。

南齊書卷三一荀伯玉傳に

從太祖還都。除奉朝請。令伯玉看宅知家事。世祖罷廣興。還立別宅。遣人於大宅掘樹數株。伯玉不與馳以聞。太祖曰。卿執之是也。

隋書卷六四陳茂傳に

高祖爲隋國公。引爲寮佐。遇待與圓通等。每令典家事。未嘗不稱旨。

②③ 三國志吳志卷三孫休傳裴註所引襄陽記に

衡每欲治家。妻輒不聽。後密遣客十人。於武陵龍陽汎洲上作宅。種柑橘千株。

②④ 魏書卷八九酷吏傳崔暹傳に

後行豫州事。尋卽真。坐遣子析戶。分隸三縣。廣占田宅。藏匿官奴。障客蔽羣。侵盜公私。爲御史中尉王顯所彈。免官。

②⑤ 晉書卷一〇四石勒載記に

所居武鄉北原山下。草木皆有鐵駘之象。家園中生人參。花葉甚茂。悉成人狀。

搜神後記卷八(學津討源本)に

新野趙貞。家園中種葱。未經抽拔。一日縮入地。後經歲餘。貞之兄弟。相次分散。

②⑥ 齊民要術種穀篇第三原註に

西兗州刺史劉仁之。老成懿德。謂余言曰。昔在洛陽。於宅田。以七十步之地。試爲區田。收粟三十六石。然則一畝之收。有過百石矣。少地之家。所宜遵用之。

たとえば高橋徹氏によって紹介された郭原平の場合、宅上で栽培された筍・瓜の賣買によって生活している。

「六朝期江南の小農民」(『史潮』第一〇七號 一九六九)

②⑦ 唐長孺氏は、南朝における官品體系に基く山澤地の制限附き所有認可とその空文化の状況を指摘しており(註⑥論文)、また隋唐法を通じて見える官人永業田は、官品體系による占有認可であった。かかる傾向は、このような私的所有の發展に對する國家からの對應を示す一例であらう。

②⑧ 註⑥參照。

註⑫参照。

③① 北史卷五四斛律金傳附斛律光傳に

帝賜提婆晉陽之田。光言於朝曰。此田。神武以來。常種禾飼馬。以擬寇難。無乃闕軍務也。帝又以鄴清風園。賜提婆租賃之。

これは、提婆が租賃（小作）したのではなく、一旦下賜をうけた提婆が小作に出したものと解した方がよい。また賜田ではあるが、ここでも耕地は分散している。

③② 太平寰宇記卷九九温州瑞安縣條に

玉環山。一名木陋嶼。……按登眞隱訣云。郝司空先立別墅於此中。自東晉居人數百家。至今湖田見在。山多蛇虎。

登眞隱訣は陶弘景の作とされるが、現行道藏の「登眞隱訣三卷」には寰宇記の記述はない。

③③ 南史卷二二王曇首傳附王騫傳に

有舊墅在鍾山。八十餘頃。與諸宅及故舊共佃之。

③④ 『六朝門閥の一研究——太原王氏系譜考——』第八章むすび（日本出版協同株式會社 一九五一）

③⑤ 一一舉げればきりがないので南・北二例を次に掲げる。

宋書卷八八薛安都傳に

（申令孫）密有反志。遣人告素兒曰。欲相從順。而百口在都。可進軍見攻。若戰敗被執。家人可得免禍。

魏書卷六一畢衆敬傳に

及安都以城入國。衆敬不同其謀。子元賓以母并百口悉在彭城。恐交致禍。日夜啼泣。

③⑥ 北史卷五十辛雄傳附辛術傳に

睢州刺史及所部郡守。俱犯大辟。朝廷以其奴婢百口及資財。盡賜術。三辭。不見許。

③⑦ 北齊書卷十三清河王岳傳に

後（高）歸彥反。世祖知其前譖……籍沒歸彥。以良賤百口賜岳家。

③⑧ 搜神記卷十七（學津討原本）に

東萊有一家。姓陳。家百餘口。……從此北行。可八十里。有一百三口。取以當之。後十日。此家死亡都盡。此家亦姓陳氏云。

③⑨ 法苑珠琳卷九五（大正藏經本、以下同じ）所引「雜鬼神志怪」に

晉陳國袁無忌。寓居東平。永嘉初。得疫癘。家百餘口。死亡垂盡。往避大宅。權住田舍。

③⑩ 魏書卷四七盧玄傳に

父母亡。然同居共財。自祖至孫。家內百口。

③⑪ 北齊書卷二十慕容儼傳附庫狄伏連傳に

伏連家口有百數。……冬至之日。親表稱賀。其妻爲設豆餅。伏連問。此豆因何而得。妻對。向於食馬豆中。分滅充用。伏連大怒。典馬・掌食之人。並加杖罰。積年賜物。藏在別庫。遣侍婢一人。專掌管籥。

③⑫ 玉井是博「唐の賤民制度とその由來」（京城帝國大學法文學會第二部論纂第一輯『朝鮮支那文化の研究』一九二九『支那社會經濟史研究』所收）

濱口重國『唐王朝の賤人制度』主篇第六章「部曲と家人の語」（東洋史研究會 一九六六）

④③ 三國志蜀志卷十五楊戲傳裴註所引「襄陽記」に

請爲明公。以作家譬之。令有人。使奴執耕稼。婢典炊爨。雞主司晨。犬主吠盜。牛負重載。馬涉遠路。私業無曠。所求皆足。雍容高枕飲食而已。忽一旦盡欲以身親其役。不復付任。勞其體力。爲此碎務。形疲神困。終無一成。豈其智之不如奴婢雞犬哉。失爲家主之法也。

これはたとえ話であるが、それだけに當時の社會通念であつたことを窺わせる。具體的な例としては、註④③の庫狄氏を擧げておこう。

④④ 三國志吳志卷三孫休傳裴註所引「襄陽記」に

臨死。敕兒曰。汝母惡我治家。故窮如是。然吾州里有千頭木奴。不責汝衣食。歲上一匹絹。亦可足用耳。

魏書卷六七崔光傳に

疾甚。敕子姪等曰。諦聽吾言。聞曾子有云。人之將死。其言也善。啓予手啓予足。而今而後。吾知免夫。吾荷先帝厚恩。位至於此。史功不成。歿有遺恨。汝等以吾之故。並得名位。勉之勉之。以死報國。脩短命也。夫復何言。速可送我還宅。

④⑤ 太平御覽卷四一一所引「祖台之志怪」に

吳中書郎盛仲。至孝。母王氏失明。仲暫行。敕婢食母。婢乃取蟪蛄。蒸食之。母甚以爲美。

④⑥ 法苑珠琳卷二三所引「冥詳記」に

晉竺長舒者。其先西域人也。世有資貨。爲富人。……其後鄰比失火。……乃敕家人。不得糧物。亦無灌救者。唯至心誦經。

④⑦ 北史卷三四趙逸傳附趙瑛傳に

皇與中。京師儉。婢簡粟糶之。瑛遇見切責。敕留輕耗。

④⑧ 隋書卷五七薛道衡傳に

道衡自以非太過。促憲司早斷。暨於奏日。冀帝赦之。敕家人具饌。以備賓客來候者。

④⑨ 太平御覽卷九一二所引「幽明錄」に

吳興戴紗家僮客姓王。有少婦美色。而紗中弟恒往就之。客私懷忿怒。具以白紗。中郎作此。甚爲無理。願尊敕語。紗以問弟。弟大罵曰。何緣有此。必是妖鬼。敕令打殺。客初猶不敢□□□□。後來閉戶欲縛。便成大狸。從窻中出。

④⑩ 宇都宮氏には、守屋美都雄氏との論争で有名な數多くの研究がある。氏の見解は、守屋氏との論争の中で少しく變化してゆくのであるが、基本的な見解は變っていない。氏の漢代家族に關する集約的な見解については次の論文がある。

「漢代家族論」(『東方學』第二三輯 一九六三)

④⑪ 魏書卷五六崔辯傳附崔楷傳に

初楷將之州。人咸勸留家口。單身述職。……遂合家赴州。……及賊來攻。楷率力抗拒。疆弱勢懸。每勸兵士撫厲之。莫不爭奮。咸稱。崔公尙不惜百口。吾等何愛身。……楷兄弟父子。並死王事。朝野傷歎焉。

ここでは、父母はすでに死亡していたようだが、なお妻子同産はともに同居しており、三族制家族の面目を保っていると言えよう。

④⑫ 宋書卷八二周朗傳に

今士大夫以下。父母在而兄弟異計。十家而七矣。庶人父子

殊産。亦八家而五矣。凡甚者。乃危亡不相知。饑寒不相卹。

⑤2 魏書卷七一裴叔業傳附裴植傳に

植雖自州送祿。奉母及贈諸弟。而各別資財。同居異爨。一門數竈。蓋亦染江南之俗也。

ここでは父はいないが、母妻子同産の三族制形態をとっているのが分かる。

⑤3 たとえば、北史卷八五節義傳王閼傳に

王閼。北海密人也。數世同居。有百口。又太山劉業與四世同居。魯郡蓋儁六世同居。並共財產。家門雍睦。鄉里敬異。

⑤4 魏書卷五八楊播傳附楊元讓傳に

一家之內。男女百口。絕服同爨。庭無間言。魏世以來。唯有盧淵兄弟及播昆季。當世莫逮焉。

そのむつかしさを知らぬのに充分であらう。

⑤5 魏書卷五七崔挺傳に

三世同居（北史本傳作五代同居）。門有禮讓。於後頗值饑年。家始分析。

⑤6 魏書卷四五裴駿傳附裴修傳に

修早孤。居喪以孝聞。二弟三妹。並在幼弱。撫養訓誨。甚有義方。次弟務早喪。修哀傷之。感於行路。愛育孤姪。同於己子。及將異居。奴婢田宅。悉推與之。時人以此稱焉。

隋書卷五十九孝矩傳附元嬰傳に

年十歲而孤。爲諸兄所鞠養。性友悌。善事諸兄。諸兄議欲別居。嬰泣諫。不得。家素富多金寶。喪無所受。脫身而

出。爲州里所稱。

⑤7 太平經合校卷一四六壽誠第二〇〇に

時以行客。賃作富家。爲其奴使。一歲數千。衣出其中。餘少可視。積十餘歲。可得自用還故鄉。

⑤8 北堂書鈔卷三八所引「祖逖別傳」に

逖爲豫州刺史。剋己務施。不蓄財產。家僮子弟。耕而後食。

⑤9 風俗通義卷九に

謹按。桂陽太守汝南李叔堅。少時爲從事。在家狗人立行。……狗於竈前蓄火。家益征忪。復云。兒婢皆在田中。狗助蓄火。幸可不煩鄰里。此有何惡。

⑥0 たとえば、魏書卷六七崔光傳に

皇興初。有同郡二人。並被掠爲奴婢。後詣光求哀。光乃以二口贖免。高祖聞而嘉之。

⑥1 隋書卷二四食貨志に

晉自過江。凡貨賣奴婢馬牛田宅。有文券。率錢一萬。輸估四百人官。賣者三百。買者一百。無文券者。隨物所堪。亦百分收四。名爲散估。歷宋齊梁陳如此。以爲常。

南朝では公認されていたと見るべきであらう。例はあげないが、北朝でも奴婢買賣は散見する。

⑥2 太平御覽卷五〇〇所引「顧譚別傳」に

譚爲太常錄尚書事。從交州。家無私積。奴婢不滿十人。具體的には四章で考察する。

⑥3 三國志蜀志卷八糜竺傳に

糜竺字子仲。東海朐人也。祖世貨殖。僮客萬人。貨產鉅

億。……竺於是進妹於先生爲夫人。奴客二千。金銀貨幣。以助軍資。

さて、濱口重國氏は「唐の部曲・客女と前代の衣食客」（『山梨大學學藝學部紀要』一 一九五二）『唐王朝の賤人制度』所收）において、奴客・僮客は、元來奴及び賓客と書くところを奴客・僮客と略記したものであるとし、それが三國時代頃から奴婢類似の一種の賤民の代稱として使用されるようになったと説かれる。これは、基本的に同意しうる。ところで我々が問題とするのは、かかる身分ではなくてその階級如何である。そこで濱口氏の引かれた三國管代の例を検討してみれば、彼らは個別に数えられており、主人の放免を必要としている。濱口氏の言にもかかわらず、やはり慶氏の僮客・奴客は謙與の對象となっているのであり、奴婢同様な内奴隸と規定すべきものである。

⑥5 太平實字記卷二 海州東海縣條に

縣理城在鬱州。山海經曰。都洲在海中。都皆郁。水經注曰。胸縣東北海中有大洲。謂之郁州。昔有道士學徒十人。遊於鬱州蒼梧之上。四百年。皆得至道。其山自蒼梧徙。至東海之上。今猶有南方草木生焉。故崔琰述初賦曰。郁州者。故蒼梧山也。故老傳言。此島上人。皆先是慶家之隸。今有牛欄村。云舊有慶家莊牧。猶枯祀祭之。呼曰慶郎。臨祭之日。著型鞭執耕鞭。又言。初取婦者。必先見慶郎。否則爲祟。宋泰始三年。於島南垂築城。置青州。卽今縣理城也。

ところで、楊守敬・熊會貞『合撰水經注疏』（臺灣中華書局一九七一）卷三〇淮水篇では、趙一清の「故老傳言」から「否

則爲祟」までを水經注の逸文とする見解を引き、兩氏ともに按語を附していない。これは、趙氏の所説を是としたからであらう。しかし、これはどうしても逸文とは考えられない。第一にそこに見える「故老傳言」の形式は、水經注の中には見られず、むしろ寶字記の常套形式であること。第二に「慶家莊牧」の「莊」について、「莊園」を表現するのに「莊」の字が用いられるのは六朝末期からであり、水經注の用語としては不適當であること。第三に「今有牛欄村」の「今」について、寶字記が隨所に用いる「今」の字は、概ね現在すなわち趙宋初を指すこと。以上の三點から考えて、故老傳言以下は、趙宋初の見聞を記したものと解したほうがよい。

⑥6 青山定雄『唐宋時代の交通と地誌地圖の研究』（吉川弘文館一九六三）第二篇第一「唐宋時代の總誌及び地方誌」參照。

⑥7 仁井田陞『中國法制史研究』奴隸農奴法・家族村落法（東京大學出版會一九六二）圖版第十三、及び「敦煌發見の天下姓望氏族譜——唐代の身分的内婚制をめぐって——」（『石濱先生古稀記念東洋學論叢』原收 一九五八）

⑥8 元和姓纂卷二に

楚大夫受封南部慶亭。因以爲姓。東海胸山。漢有慶敬。蜀志有慶竺生方。宋有慶昂之。又慶信撰說要注穀梁。

なお慶信については『經典釋文』卷一「序錄」穀梁條に「字南山。東海人。魏樂平太守」と見えるから、慶竺と同世代の人であらう。

⑥9 註④參照。

⑦0 註④參照。

⑦① 法苑珠琳卷七〇所引「冤魂志」に

宋世永康人呂慶祖。家甚富貴。當（太平廣記卷一二七、作常字）使一奴名教子。守視塋舍。以元嘉中。便往客行。忽爲人所殺。族弟無期。先大舉慶祖錢。咸謂爲害。無期資羊酒脯。至松所而咒曰。君奈酷如此。乃云是我。魂而有靈。使知其主。既還。至三更。見慶祖來。云。近履行見教子哇噓不理。許當痛治奴。奴遂以斧斫我背。將帽塞口。因得齧奴三指。悉皆破碎。便取刀刺我頸。曳著後門。初見殺時。諸從行人。亦在其中。奴今欲叛。我已釘其頭著壁。言畢而滅。無期早旦以告其父母。潛視奴所住壁。果有一把髮。以竹釘之。以看其指。並見破傷。錄奴詰驗。臣伏。又問。汝既反逆。何以不叛。奴云。頭其被繫。欲逃不得。諸同見者。事事相符。卽焚教子并其二息。

この部分については、ベリオ氏蒐集の敦煌本殘卷（P・三一・二六）がある。かなり同異があるが、論旨には影響しない程度なので、しばらく珠琳に據っておく。なお、重松俊章氏が「敦煌本還冤記殘卷に就いて」（『史淵』第十七輯 一九三七）に原文を載せ、珠琳・廣記との對校を行なっておられる。参照され

たい。

⑦② 唐法上においては、奴婢間にできた子供は婢にだけ從屬し、しかも主家の所有に歸すべき物として規定されていた。（濱口重國『唐王朝の賤人制度』主篇第一章「私奴婢の研究」）

⑦③ 顏氏家訓涉務篇第十一に

江南朝士。因晉中興。南渡江。卒爲羈旅。至今八九世。未有力田。悉資俸祿而食耳。假令有者。皆信僮僕爲之。未嘗目觀起一墾土。耘一株苗。不知幾月當下。幾月當收。安識世間餘務乎。

ここに見える僮僕などは、勞働過程を掌握していた奴隸の好例となろう。

⑦④ 魯迅『中國小說史略』第五篇「六朝之鬼神志怪書（上）」

吉川幸次郎「『中國古小說集』解題」（筑摩書房『世界文學大系』第七一卷 一九六四）

⑦⑤ 魏書卷七七高崇傳附高謙之傳に

居家僮隸。對其兒不撻其父。母生三子。便免其一。世無髡黥奴婢。常稱。俱稟人體。如何殘害。

⑦⑥ 註49宇都宮論文、註③西村論文參照。

Large-scale Land Proprietorship and Management in the Han 漢 and Six Dynasties 六朝 Periods

by Shin'ichiro Watanabe

This article discusses the management of large landholdings on the part of the Great Families 富豪 from the latter half of the second century to the end of the sixth. To begin with, the existing forms of large landownership and the nature of the development of private proprietorship are clarified. Then the problem of the Great Families' lineage organization, which played a central role in connection with the labor force on demesne lands, is taken up. Further, the small peasants who were involved in the management of the Great Families' land in a variety of ways, as hired hands, tenants, and so forth, are examined. Finally, on the basis of an assessment of the level of productivity in this period, it is concluded that the Great Families' land management was the most advanced kind, whereas the management of small holdings by the stratum of peasants on the outside had not yet taken shape.

In this fashion, it is suggested that the large-scale proprietorship of the Great Family stratum and its management constituted a prototype for the landlord-tenant (*dianhu* 佃戶) order which appears in the Sung and later periods.